

マルティン・ルターの
「二種の義」の概念による
福音と福音的生活の再発見

神戸ルーテル神学校
教授就任記念講演

2008年10月26日



正木牧人

目次

目次	2
感謝と報告	3
信仰と生活の改革者ルター	4
福音の再発見	5
宗教改革の神髄	5
福音の再発見は受動的義の発見	6
受動的義と能動的義の区別	6
「二種の義」はふたつの別種の義	7
福音的生活の再発見	9
義とされた者の能動的な生活	9
「律法と福音と「二極の義」	10
ルターの「二極の義」の理解と実践	11
神学校教師であり牧会者であったルターは語る	14

感謝と報告

本日はお忙しい中、神戸ルーテル神学校の教授就任式を覚えてご出席くださり、心から感謝をいたします。昨年神戸ルーテル神学校は創立50周年をお祝いしました。長きにわたり牧師や神の国の働き人を産み出してきた本校の教授として神学教育をうけもつ立場で主にお仕えするには、私は知的にも霊的にもはなはだ未熟なものです。大きな恐れを感じ身の引き締まる思いです。どうぞ主に支えられて職務を全うすることができるよう、これからもいっそう皆様のお祈りに覚えていただきたく願っています。

そのようにいいながら矛盾するように聞こえるかもしれませんが、実は私には神学校で教えることよりも、できることなら自ら全時間を教会で牧師として過ごしたいという願いがあります。しかし私の主はそのような私の思いをよく知っていてくださる上で、やはり神戸ルーテル神学校で私を鍛え、またお用いになろうとしておられます。私はその召しを確信し、その職務を重く受け止めます。神様は人間の思いを超えてすばらしく人生を導かれます。私の小さなこれまでの歩みを振り返っても、牧師・伝道者として成長したい一心で受けてきた教育が、不思議に現在の神学校教師として準備になっています。

高校2年生の5月25日の夜、この神戸ルーテル聖書学院チャペルに座っていました。青谷ルーテル教会主催の春の特別伝道集会でした。集会が終わりに近づいた8時50分ころ、招きの時間がありました。エレミヤ書29章11節の御言葉をいただき、私は招きに答えて生涯を主におかえししました。1981年4月から1984年6月まで第十一期生として神戸ルーテル神学校で学びました。1987年3月に牧師按手を受けました。牧師となって一生懸命に忙しくする中で、牧会伝道のために知りたいひとつのことがどうしても心から離れず、ついに1990年9月から一年半の米国留学が許されました。帰国後、学びを生かして東徳島教会で牧師として働いているときに、将来神学校の働き人になるように、と博士課程の学びを始めるように勧められました。そして1999年から2002年まで三年間、鍋谷先生やソルフス先生、宮本先生や谷口先生、そして橋本先生が学ばれたセントルイスのコンコーディア神学校に学びました。語学や授業、試験など苦労しましたが、博士論文では牧師として歩む中でどうしても知りたかったテーマを選びました。「ルターはどのように信仰生活を励ましたか」というものです。よい指導教授に恵ま

れ、すばらしい環境、すばらしい人々に支えられてマルティン・ルター
の神学のぬくもりと気迫に満ちた心にふれました。

先日発行されました神学校ニュース 114 号では博士論文の一部を紹介
させて頂きましたが、今日はルターの宗教改革が福音と福音的生活を
再発見したことを短くお分かちしたいと思います。

信仰と生活の改革者ルター

1517 年 10 月 31 日に、ルターがウィッテンベルク城教会の扉に「九十五
箇条の提題」をはりだして、世界史に残る宗教改革が始まったとされて
います。教会暦から見ますと、今年は今、10 月 26 日が最も 10 月
31 日に近い直前の日曜日ということで本日が宗教改革主日として祝わ
れています。

ルターは若き日には、模範的修道士として最も熱狂的な教皇派でした。
1505 年七月にシュトッテンハイムの落雷事件を機にエルフルトのアウ
グスチヌス修道会にはいります。1507 年に司祭に叙階され、1508 年
秋からウィッテシペルグの修道院に移り大学で講義と勉学に励むよう
になります。1509 年に聖書学士、1512 年に神学博士となります。聖書
教授としての講義は 1513 年 8 月からの詩編講解にはじまります。旧
約聖書の担当でしたが、メランヒトンが来るまで担当した新約聖書の講
義も受け持ち、ローマ書講義を 1516 年から、ガラテヤ書講義を 1517
年から、またヘブル書講義を 1518 年から受け持ちます。1518 年には
再び詩編講義を始めます。ルターはテツツェルらによって贖宥状が売り
出されたとき、説教者として、また若き神学博士として、贖宥状の販売
を教皇は必ずしも認めてはいないとして反対しました。1517 年の「九
十五箇条の提題」や「九十五箇条の提題の解説」の中で、贖宥状よりも愛
のよきわざの方がはるかに優先するものだ、として、教皇の意向によら
ない間違った実践がこれ以上展開されないように、教皇の名誉を守るた
めに主張したのです。神学と牧会の両面からの確信によるものでした。
ところがその教皇によって告発され、ローマへの召喚状が送られてきま
す。全教皇制がルターひとりにむかって立ち上がり、数年の間、教皇
派はルターに働きかけて自説を撤回し教皇と和解するように勧めまし
た。討論の機会も与えられました。ついに 1521 年のウオルムスの帝国
議会に召喚され、自説の撤回を再び強く迫られますが、聖書からの説明
がないと私は撤回しない、と明言します。そのとき「我ここに立つ、神よ
助けたまえ」と言ったとされています。ルターは世の力の論理に屈する
ことなく、聖書による神学的・牧会的な確信に堅く立ったのです。

福音の再発見

宗教改革の神髄

宗教改革の神髄は、福音の再発見です。マルティン・ルターは1545年の「ウィッテンベルク版ラテン語著作全集第一巻序文」の中で宗教改革運動のいきさつと自らの福音の再発見の経験にふれています。晩年のルターが一連の宗教改革の出来事をどのように振り返ったか、命をかけて「我ここに立つ」と立場を明らかにした福音の再発見のいきさつをルター自身のことばで味わってみましょう。少し長いですが、抜粋しながら引用します。

「わたしはローマ信徒への手紙においてパウロを理解しようとする異常な熱意にとらえられていたのであるが…『福音には神の義が啓示されています』という第1章17節にあるたったひとつのことばが…妨げとなっていた。なぜなら、私は『神の義』というあのことばを憎んだからである。…私はそれを、哲学的に形式的、あるいは能動的義として理解するように教えられてきたのである。神は、これによって義であられ、罪人と不義な者を罰するというのである。私は非の打ち所のない修道士として生活したのであるが、神の御前においては、きわめて不安定な良心を持った罪人であると感じ、自分の罪の償いによって神をなだめたと確信することはできなかった。私は、義であって罪人を罰する神を愛さないで、むしろ、この神を憎み、冒瀆でないにしてもひそかに神に対して怒っており、次のように言って確かにとめどなくつぶやいていた。『原罪によって永遠に失われたみじめな罪人が、十戒によってあらゆる種類の災厄に押しつぶされるだけではまだ足りないかのように、福音によっても悩みに悩みを加え、そのうえ神が福音を媒介としてその義と怒りとを持って私たちを脅かされるとは』と。ついに神のあわれみによって、昼も夜も黙想にふけり、私はことばの脈絡に注目していた。すなわち、記されているままで言えば、『福音には、神の義が啓示されています』というのと、『正しい者(義人)は信仰によって生きる』というのである。そこで神の義とは、義人が神のたまものによって、すなわち信仰によって生きる、そのような義であることを理解し始めた。それはこういう意味だ。神の義、すなわち、恵み深い神が信仰によって私たちを義とされる受け身(受動的)の義は福音によって啓示されたと。信仰によって神関係の正しくなった者は生きる、と記されている通りである。ここで私は、全く生まれ変わらされ、開かれた門を通してパラダイス

そのものの中へ入れられたように感じた。ここにおいて聖書全体の持つ他の面が、ただちに明らかになった。次に私は記憶のまま、聖書を通覧した。そしてなお他の用語においても同様なことを知るに至った。神のわざとはかみが私たちのうちになさるわざであり神の力は神が私たちを強める力である…。さて私は以前『神の義』ということばを憎んだ憎しみと同じ強さで、私にとって最も慕わしい者となった言葉を、愛を持ってたたえた。…その後、アウグスチヌスの『霊と文字』を読んだが、そこでは予期に反してアウグスチヌス自身も神の義を同じように解釈して、神の義とは神が私たちを義とされるとき、私たちに着せてくださるものとしていることに気づいた。そしてこれは従来十分に論じられていなかったし、アウグスチヌスも神が義を与えられる行為について、すべてのことを明確に説明しなかったけれども、それにもかかわらず、私たちが義とされる神の義が教えられていることは喜ばしいことである。」(ルター研究所：ルター著作選集・教文館 2005年 p 645)

福音の再発見は受動的義の発見

ここでルターが自分のことばで語っているように、宗教改革的な福音の再発見は「神の義」の聖書的理解の再発見にほかなりません。「神の義」は、義なる神が罪人を裁く神のただしさと理解されてきました。その場合、いくら人間が能動的に義なる生活の努力をしても、義なる神の基準を満たすことはできず、怒りをもって罰せられるのです。ルターはこの「神の義」を憎んでいました。しかし、文脈に注意して聖書をよく読み込んでいく内に、義には能動的義と受動的義の「二種の義」があることを知ったのです。パウロの言う「神の義」は神が与える義、私たちが神から受ける受け身(受動的)の義であり、恵み深い神が信仰によって私たちが義とされる義であることに気付きます。この「神の義」が福音によって啓示されたというのです。そして信仰によって神の義をいただいた者、つまり神関係の正しくなった者は生きる、ということを発見して、「神の義」ということばを最も慕わしいことばとして愛するようになりました。福音の再発見は、福音によって啓示された神の義が受け身の義、受動的義であった、ということでした。

受動的義と能動的義の区別

受動的な義を能動的な義と区別することは福音の理解のために最も重要なことです。1535年出版の「ガラテヤ書講解」は先の1517年のガラテヤ書講解と区別するために、ガラテヤ書大講解とも呼ばれ、ルター

の著作の中で最も愛されている著作のひとつです。この書はルターの「律法と福音」という神学的概念の最もよい解説の書としても知られていますが、実はルター自身は「ガラテヤ書大講解」の主題は受け身の義と能動的な義の完全な認識と区別である、と考えていました。大講解の冒頭、1章1節の解説に入る前に、ルターは「聖パウロのガラテヤ人への手紙の要旨」という小論を載せています。ルターは受け身の義は確かな良心の慰めである、とします。ルターは次のように言います。「信仰の義、すなわちキリスト教的な義は受け身の義と呼ぶべきである。これは奥義のうちに隠された義であって、この世はこれを理解しない。いや、キリスト者さえ十分にはこれを理解しないのだし、試練の中でこれを把握するのはむずかしいのである。だからそれはたえず教えられ、絶え間なく訓練されるべきである。良心の苦悩と恐れとのなかにあってそれを保つことも把握することもできない人は、しっかりと立っていることができない。なぜなら、この受け身の義ほどに確実、確固たる、良心の慰めはほかにないからである。」（ガラテヤ書大講解・上 ルター著作集第二集第十一巻、聖文舎、p12 以下）

私たちは受け身の義について絶えず教えられ訓練されなければなりません。なぜなら、「人間の理性は能動的な義、すなわち我が手で勝ち取る義を想像することを駆逐し得ず、また受け身の義、すなわちキリスト教的な義に注目するよう立ち上がることができずに、ただもう能動的な義にしがみついている。我々の本性の弱さを利用して、悪魔は我々のうちにそのような考えを増し強める」からです。ですから、ルターは絶望と永遠の死と戦うに際して、「自分をすべての能動的な義と自己の義と神の律法の義とから引き離して、恵みと哀れみと罪の赦しとの義であるあの受け身の義をひたすらにつかまえる、と確信をもって言う、要するに、この義はキリストと聖霊の義であって、我々が行ったり持ったりするものではなく、父なる神がイエス・キリストによって我々に与えてくださるとき、我々が受け、かつ受けいれるものなのである。」と解説します。

「二種の義」はふたつの別種の義

ルターはガラテヤ書講解の「聖パウロのガラテヤ人への手紙の要旨」の中でこの「二種の義」の区別をもって「我々の神学」と呼びました。「これが我々の神学である。これによって我々は、道徳と信仰、行いと恵み、政治と宗教が混同されないよう、能動的な義と受け身の義という二つの義を正確に区別することを教えているのである。これら二つの義はどちらも必要であるが、どちらもそれぞれの限界内にとどまらなければ

ならない。キリスト者の義は新しい人にかかわるし、律法の義は肉と血とから生まれた古い人にかかわる。」

このような「二種の義」の理解は、ルターにユニークなものでした。ルターは私たちの救いは自分の行う能動的な義ではなく神が与える受け身の義にあずかることであると明言しています。それは義とされるという福音の理解がまったく新しいことを意味します。そこでは、義とされる方法の違いだけではなく、どの領域で義とされることを求めるかという、根本的な義認理解の違いがあることに注目しなければなりません。すなわち、受け身の義を受ける者はその信仰における存在のリアリティの領域、つまりアイデンティティにおいて義と認められているということ、また能動的な義によって義とされることを求める者はその行動の領域、パフォーマンスによって義とされることを求めるということです。

この点で、ルターとアウグスチヌスは違った理解をもっていました。確かに先に引用した「神の義」を発見したときの回顧録でルターは、予期に反してアウグスチヌスも受け身の義を理解していた、と語っています。しかしそのあとすぐ、「アウグスチヌスも神が義を与えられる行為について、すべてのことを明確に説明しなかった」と注意を促しています。

アウグスチヌスは、神の義とは神が私たちを義とされるとき私たちに着せてくださるものと理解していました。この点でアウグスチヌスは「受け身の義」をルターと同じように理解しているように見えます。しかし、アウグスチヌスにとって神が私たちに義を着せてくださるという意味は私たちが義を成就することができるように神の愛を恵みの聖霊によって私たちの心に注いでくださる、ということでした。そしてその愛によって私たちが律法を成就する力をいただくのです。ですからキリストの主な働きは私たちの内に愛を増すということになります。アウグスチヌスにとってクリスチャン生活は次のようになります。クリスチャン生活は常に神の戒めを意識し、神からいただく愛という恵みをよく用いて、真の義を達成するための、謙遜な長いプロセスである。クリスチャンの生涯は「希望」を捨てないで「愛」という恵みの賜物を与えてくださる神を「信」じ、少しでも神の御旨を行うことができるように努め続けるプロセスです。その際、クリスチャンは恵みの聖霊に癒されることによって、裁きをおそれる心からではなく、神を愛する心から律法を愛しよき行いをするように日ごとに導かれます。

このようなアウグスチヌスの福音や信仰生活の理解とルターのものとの違いを見るのは非常に困難かもしれません。アウグスチヌスにおい

でもルターにおいても義は神から来るからです。しかしルターと違ってアウグスチヌスは、受け身の義と能動的な義という「二種の義」を区別する理解がないことは明白です。ルターは受け身の義によってキリストの義が私たちに帰せられ私たちがアイデンティティの領域で義と認められると言います。アウグスチヌスは受け身の義によって私たちが律法を行う愛を神からいただくと考え、律法を果たすことによる義、すなわちパフオーマンズの領域の義のみを見ており、そこには信仰によるリアリティとしてのアイデンティティの領域での義を見る発想がありません。すなわち、アウグスチヌスの場合は行動の領域という一種の義についてのみ語っており、神が私たちに愛を注いでその義を達成できるように導いてくださるので謙遜に失望せず求め続ける生涯を送るようにとクリスチャンを励ますのです。

ルターの福音の再発見は、「二種の義」の区別によってより鮮明になります。受け身の義と能動的な義の「二種の義」は、存在の信仰的リアリティと行動という、区別された領域の義です。神の義の発見は、神が私たちにキリストを着せることによりキリストご自身という義を与え私たちが義と認めることでした。この信仰のリアリティであるアイデンティティの領域での受け身の義の再発見こそ宗教改革の神髄なのです。

福音的生活の再発見

義とされた者の能動的な生活

福音の再発見は受け身の義の再発見でした。では、それによって「二種の義」のうちのもうひとつの種類義、能動的な義は捨てられたのでしょうか。いいえ、受け身の義によって信仰によって神の子とされた者は、神の子としてのアイデンティティを持つ者として能動的な義を行う生活を信仰によって営みます。アイデンティティは既に受け身の義によって神の子とされていますから良心は平安です。ですからよい行いは義とされるためによりよい行いをするのではありません。義とされたので義を行うのです。

ここでよい行い、義を行うとは行動の領域での能動的な義のことです。この意味で、福音の再発見を土台にしたルターの宗教改革は、同時に、本当のよい行いの発見、能動的な義の発見、福音的生活の再発見であったと言えます。ルターの宗教改革は、義とされることと義とさ

れた者のこの世での生活、すなわち救いと信仰生活の全体理解にかかわる宗教改革でした。

では、受け身の義をいただいた者が行う能動的な義はどのようなものでしょうか。ルターは次のように言います。「この(受け身の)義を心に持っているならば、私は天からふって地を潤す雨のようになる。すなわち、私はもうひとつの御国に入って、機会の許す限りよい行いをするのである。もし御言葉に仕える者であれば、説教し、心の弱い者を慰め、聖礼典を執行する。もし一家の主人であれば、家と家庭を治め、子どもたちを教育して信仰と正直とに至らせる。役人であれば神から命じられた務めを行う。…なぜなら神がこれらを欲しておられると言うこと、また、この服従が神の御心にかなうと言うことを知っているからである。」

さて、1518年に書いたとされている、その名も「二種の義の説教」という小論があります。これは棕櫚の主日のテキスト、ピリピ書2章5-6節に基づく説教といわれていますが、中心にあるテーマはクリスチャンの義には二種類ある、ということです。おもしろいことにルターは二種の罪と「二極の義」をペアにして、すなわち原罪と受動的義、行為罪と能動的義を対にして説明するのです。原罪は私たちのものでない別種のものとして、私たちの行為なしに、生まれながらにして私たちに結びつけられています。同じく受け身の義はただ恵みのみによって私たちの行為なしに私たちの内に与えられます。そして原罪という罪の性質が人の思いや言葉や行いに罪の実を結ぶように、第二の義、すなわち能動的な義は私たち自身の義であり、受け身の義による性質から発する義です。それは第一の義、受け身の義から出た産物であり、その実であり、その結果です。

「二種の義の説教」ではまた、能動的な義の具体的な三分野を示します。第一に自分自身について欲望を十字架に付けてよい行いによる有益な生活を送り、第二に隣人を愛し、第三に神に対する謙虚と恐れに生きる、ということです。

「律法と福音と「二極の義」

さて、ルター神学の特徴として「律法と福音」の区別が挙げられます。神の立てた秩序を表す「律法」と、論理的には導き出すことのできない神の一方的なあわれみによるキリストの十字架を伝える「福音」の両方が、神の言葉を語るとき区別されつつ、且つ分離されず語られることが重

要です。そして、御言葉を聞く者の側に焦点が当てられたとき、キリスト者の姿は「二種の義」の概念をもってよく表現し理解することができるでしょう。神は私たちにキリストを着せて、私たちの罪を赦し新しい命を与えます。私たちは一方で自らの古いアダムを殺し、他方で隣人の利益を求め、このように神の御心を両面においてなすことで神に対して信心深く生きます。この両面が受け身の義の完成でもあります。ルターはこのように励まします。「説教者や教師であろうとする者は、この点に最大の注意を払い、律法の義とキリストの義との区別をただしく保たねばならない。このことは語るにやすいことであるが、もっとも熱心にこれをつとめ行おうとしてもなお、経験し、用いるには、すべてのことの中で最も難しいことである。」「二種の義」を正しく区別しながら両方を語ることが、クリスチャン生活を励ますことの秘訣です。「二種の義」を区別することは、人の救いの定義を純粹に福音的に保つことです。またそれは同時に、救われた者が主体的・能動的に、また自由で創造的に、この世で生きる福音的生活を正しく教えることなのです。

ルターの「二種の義」の理解と実践

ルターが「我々の神学」と呼んだ「二種の義」の神学ですが、「二種の義」という用語は様々に用いられています。「二種の義」は Duplex iustitia の訳語ですが、two kinds of righteousness また double justice とも訳されます。最後にこの「二種の義」という用語をめぐるルターと他の人々との違いを確認することでルターの理解を深めましょう。

例えばスイスのチューリッヒの宗教改革者であるツヴィングリは「神の義と人の義」という書を 1523 年に著しています。（宗教改革著作集第五巻ツヴィングリとその周辺 I 教文館 1984 年、p38）このツヴィングリとルターはヘッセン候フィリップスのマールブルク城でもたれた所謂マールブルク会談で出会い、福音理解について討論をしました。

ツヴィングリは彼なりの「二種の義」の概念を用いて、宗教改革が既存の社会的正義の秩序を崩す革命ではないことを強調しました。ここでは「義」は法や権利、司法権をめぐる概念です。神の義は、神から発する絶対的な義であり人間には内面的にかかわるもの、人の義とは、神の義と対照的に相対的で暫定的な義でありこれが人間に関してはその外面的行為のみを問題とします。神は人間の義の執行者として、この世の権力、為政当局者を定められました。人間の義は貧しく弱くあっても原則としてこの神の代理人に服従の義務を負います。このように宗教改革が革命を目指していないことが説明されています。

ツヴィングリは罪人である私たちのために神は罪のないキリストを通してみもとに近づくことができるようにしてくださったことを教えますが、人間には依然として人の義の基準に従ってではなく神の求められる「神の義」に生きるの義務があることを教えます。ツヴィングリにとって神の義はその義をもって人を義とする義ではなく、神の法廷での正しさの基準を述べるものとなっています。ツヴィングリにとって神の義も人の義も、行動、パフォーマンスの領域の義の概念です。

ローマ・カトリック教会はルターの晩年から死後にかけてトリエント公会議を開き、教会としてルターの教えに反対しました。1547年1月のトリエント公会議の第六回総会で「義化についての教令」が討議されました。(宗教改革著作集第13巻カトリック改革 教文館1994、p333) ルーテル教会では justification を、義と認めるという意味で「義認」と訳したり、義と宣告するという意味の「宣義」と訳して、キリストの義が私たちに転嫁されることで私たちが神に義と認められるという信仰的リアリティを表現します。これに相当するローマ・カトリック教会の教えは「義化」と呼ばれ、そこには人は神の徳が注入されて存在論的に義人に変化するという理解が表現されています。

トリエント公会議のこの教令では、「義化は神からのキリスト・イエスによる先行的な恵みから始めなければならない。それはかれらの功績が全くないときに彼らを召し出すキリストからの召命にほかならない。その結果、罪のゆえに神から離れていた者は、彼らを促し、助け起こす恵みのゆえに、みずからの義化へと向きを変えるよう、心を整えられる。それはまた、彼らがこの恵みを自由に承諾し、それと協力する限りにおいてである。」と述べられています。義化のためにはそれに先だって神からの召しと人の自由意志の協力が前提になっています。

義化における「神の義」の役割は、形相因としての「人を義とする」働きです。この点だけを見るとルターの「神の義」の理解を肯定しているかに見えます。しかしそれはルターの義話論とは違った文脈で用いられています。キリストによって義とされる人々のところに聖霊を通して神の愛が注がれ、またすべての賜物、すなわち信仰、希望、愛が内にそそがれます。義化に先立つ信仰と行いが必要とされます。その信仰と行いでは、義化の恵みにあずかるには十分ではありません。神と教会のおきてを守るという愛を伴う信仰によって人は恵みによって受けていた義の内に成長し、よい行いを伴う信仰がさらに育ちます。義化は信仰・希望・愛という神の徳が注入されて人が存在論的に義人に変化することです。クリスチャンの人生はこのように義とされていく過程です。義と認められ義と宣

告される、というルターの義話論とは違う文脈で「神の義」の概念が用いられていることがわかります。信仰「のみ」による義話談は拒否され、また人が救いの確証を持つ可能性は否定されます。

さて、このように見ますとローマ・カトリック教会では義化のための準備の条件がそろってはじめて義化の緒に就き、さらにそれでは不十分であるので次に義化の第二段階として義におけるクリスチャンの成長があるという、いわば二段階の義を考えているようです。神の働きとしての義化を強調しつつ、救いや義化の完成の確信は人には与えられないものとされています。その確信が謙遜さを奪いよい行いに怠慢になる要素とならないためです。この二段階の義にはルターの言う「二種の義」の区別はなく、能動的な義による義化が段階的にとらえられています。

実はこの二段階の義の教えはトリエント公会議に先立ってもたれた1541年のレーゲンスブルク宗教協議に発端があります。それはカトリックとプロテスタント双方の歩み寄りの最後の機会でした。そこで義話論の一致をめざしてローマ・カトリック教会のセリパンドやグロッパーが彼らの「二種の義」の概念を提案しました。プロテスタント側からメランクトンやカルヴァンも出席し、カトリック側からエックらも出席しましたが、プロテスタント側の推進者はブーツァー、カトリック側はグロッパーでした。ブーツァーとグロッパーは両者とも人文主義者エラスムスの影響を受けており、彼らの提唱した「二種の義」の教説もエラスムスの考え方が基礎にあります。義とされることの土台は恵みに基づく一方、よい行いを伴う信仰によって人は義とされるのですが、人間の功績でもあるこの義は永遠の命を得るのには不十分であるため、最終的にはキリストの功績によって不足分が補われるという「二種の義」の概念を提案しました。この概念も救いを二段階の能動的な義によるものと理解しています。この提案は結局プロテスタント側からもカトリック側からも拒否されましたが、それでもセリパンドはトリエント公会議の義化の教令の草案者に任じられ、文書に影響をあたえています。

これらのルター以外の「二種の義」の考え方には受け身の義と能動的な養の明確な区別がありません。言葉の使い方によって違いはありますが、一方でキリストにあって与えてくださるという「受け身の養」的な養は、実は「能動的な義」を伴うことが前提や条件になっています。そこにはキリストがご自身を与えてくださることによる「受け身の義」、そして救いの確信や福音による平安は存在しません。他方、本来は「受け身の養」の実であるよきわざとしての「能動的な養」は、救いの段階の中に組み入れられます。それでは「能動的な養」は自らの救いの達成のために神に見て認めていただくための行い、隣人に対してなされていても純粹

には隣人のためだけになされているのではなく、自らの救いの条件を満たすためになされている愛の行いに留まってしまいます。

このことから私たちは、ルターが大気にした「二種の義」の区別がいかにユニークで重要な福音の再発見、そして福音的生活の再発見であったかをうかがい知ることができるのです。

神学校教師であり牧会者であったルターは語る

私たちはこのように、宗教改革者ルターの教えから、聖書の神髄を学びます。宗教改革者ルターの暮らしは、神からいただいた義に土台を置き、世にある使命に積極的に生きた生涯でした。

そしてルターは神学校教師として、また牧会者としての召しにふさわしく生涯を貫いたのです。

ルターは若い修道士時代にウィッテンベルク大学の神学校教授に任じられました。それは宗教改革の前のことでしたが、ルターはこれを神の召しとして受け取り、終生その任を担いきりました。神学校教師としての一生です。

聖書研究を通してルターは、キリストの故に無代価で与えられるはずの罪の赦しと永遠のいのちが教会の贖宥状によって堰き止められ人々に届いていない実態に気づき、牧会者として、また説教者として宗教改革をはじめ、また貫きます。ルターの最後も牧会者の姿です。頼まれて1545年10月、12月に続いて1546年1月終わりに遠い故郷アイスレーベンを訪ね、ルターは頑固な伯爵たちの間の不和をついに調停して力尽き、翌日2月18日63歳の生涯を閉じました。牧会者としての一生です。

ルターはその生涯を通して私たちに、しっかりとキリストの義を受け、また義人としてしっかりと生きていくように励ましています。最初から最後まで神学者であり牧会者であったルターの教えと暮らしの姿勢が、神戸ルーテル神学校で教える者を整えます。願わくはここで学ぶ者たちが神に義とされる光栄と喜びと安らぎに憩いつつ、積極的に福音と福音的生活を正しく教え生きる者としてくださいますように。